腫瘍先行性granulocytic sarcomaの1例

福岡大学医学部第一内科

森岡英次◇ 久野修資 石橋守興 瓦 隆
 教正院敬子 木村暢宏 奥村 恂

概要 症例は37才，女性，右鼠径部腫瘍の精査治療を目的として入院した。同部腫瘍の生検で悪性リンパ腫（**lymphoblastic type**）と診断され化学療法を行った。発症24カ月後に胃粘膜下腫瘍が出現し，同部の生検および初発時腫瘍の細胞生化学的な検索により**granulocytic sarcoma**と判明した。初発時の骨髄および末梢血に白血病を示す幼若細胞の出現がないことより腫瘍先行性**granulocytic sarcoma**と診断し，さらに再発時の芽球がペルオキシダーゼ陽性，表面マーカー上**myeloid**系であることを証明した。今回腫瘍先行性**granulocytic sarcoma**のまれな1例を報告し，生検腫瘍の細胞化学的検索の重要性を強調した。

〔日内会誌78：840～841，1989〕

緒言： 顆粒球性肉腫(**granulocytic sarcoma**)は顆粒球系幼若細胞より成る腫瘍形成性悪性腫瘍であり，急性骨髄性白血病(AML)と深いかわり合いを有している。なかでも髄外腫瘍が先行し遅れてAMLの発症を認める腫瘍先行性**granulocytic sarcoma**の報告はまれである。また初発時は骨髄および末梢血に白血病の所見を欠くことから，臨床的，病理組織学的に悪性リンパ腫と診断されることが少なくない。今回我々は右鼠径部腫瘍で発症した腫瘍先行性**granulocytic sarcoma**を経験したので，若干の考察を加えて報告する。

症例： 37才，女性，主婦。主訴： 右鼠径部腫瘍。既往歴： 26才，虫垂切除術。生活歴： 月経28日型，整。飲酒（－），喫煙（－）。現病歴： 昭和59年12月に右鼠径部に約3cmの腫瘍出現，生検にて**malignant lymphoma (lymphoblastic type)**と診断され，昭和60年4月入院した。入院時現症： 身長160cm，体重52kg，眼瞼結膜に貧

図1. リンパ節生検組織像，HE染色(×100)。異型性を呈する腫瘍細胞のびまん性の増殖を認める。核分裂像を散見する。

血なく眼球結膜に黄疸なし。左頸部に径1cmのリンパ節を触知。胸部に異常なし。肝・脾・腎触知せず。右鼠径部リンパ節触知。入院時検査成績： 血液生化学検査では異常なく，血沈は1時間値30mmと軽度亢進し，CRPは1+であった。血算ではHb 12.0g/dlと軽度貧血を認め，白血球数は7500/

〔昭和63年5月11日受稿〕

A case of granulocytic sarcoma preceding acute nonlymphocytic leukemia

Eiji MORIOKA, Shuusuke HISANO, Morioki ISHIBASHI, Takashi KAWARA, Keiko KYOUSHOUIN, Nobuhiro KIMURA and Makoto OKUMURA The First Department of Internal Medicine, Fukuoka University School of Medicine, Fukuoka

mm³で、幼若細胞は認められなかった。骨髓穿刺、生検でも正形成性骨髓で異常細胞は認められなかった。経過：右鼠径部リンパ節組織診断で悪性リンパ腫の診断により(図1)、4月VEPA療法を開始した。右鼠径部残存リンパ節も消失し完全寛解となり、6月退院した。昭和61年3月末梢血に幼若細胞が出現し骨髓にも同様の芽球がみられ、4月再入院した。VEPA療法を開始したが5月胃粘膜下腫瘍が出現した。同部の生検にて粘膜固有層に腫瘍細胞の浸潤が見られ、組織学的に右鼠径部の腫瘍細胞と同様の細胞が見られた。またパラフィン切片で行ったnaphtol ASD chloroacetate esterase染色および抗lysozyme抗体によるPAP染色にて芽球が陽性であり、また初発時の右鼠径部腫瘍も同様の染色所見を呈した事よりgranulocytic sarcomaと診断された。以上の所見および初発時の骨髓穿刺、生検の所見より腫瘍先行性granulocytic sarcomaと診断した。BH-AC AMP療法に変更し、胃粘膜下腫瘍も消失し血液学的にも寛解に入り8月に退院した。昭和62年2月に末梢血中に芽球が出現し骨髓穿刺にて、ペルオキシダーゼ陽性で分化傾向の少ない幼若細胞が73%を占め、AML (FAB分類M1)と診断した。再発時の芽球の表面マーカー検索ではMY 7が陽性で、幼若細胞はmyeloid系であった。昭和62年2月第3回の入院し、BH-AC AMPにより寛解となり外来経過を観察している。

考案：Granulocytic sarcomaは髄外に発生した顆粒球系幼若細胞から成る腫瘍形成を特徴とする疾患である¹⁾。本邦では1904年に林らがchloromaとして報告しているが²⁾、granulocytic sarcomaと記載された例はまだ少ない。Krause³⁾の報告ではgranulocytic sarcomaは骨髓性白血病患者

の剖検例において3～8%に認められ、非剖検例の2.9% (28例/950例)に認められている。さらにAMLに先行したgranulocytic sarcomaは本邦では星野ら⁴⁾、清水ら⁵⁾の報告が見られるが、0.6% (6例/950例)と極めて少ない。

この様に腫瘍 (granulocytic sarcoma) が先行するとしばしば悪性リンパ腫と誤診される事が多く、リンパ節生検組織のエステラーゼ染色等の細胞化学的検査や、電顕による超微形態学的検査を鑑別のため行うことが必要であるとの報告は多数見られる⁶⁾。本例も初発時に細胞化学的検査を行っていたら、初発時にgranulocytic sarcomaの診断がついた可能性がある。特に腫瘍先行性の場合はそのほとんどが白血病に移行しており、予後も不良である。早期に診断がつけば骨髓が正常なうちに自家骨髓移植等の治療が可能と思われる。今後このような症例の集積が待たれる。

文 献

- 1) Rappaport H; Atlas of Tumor Pathology sec. 3, fasc. 8. Armed Forces Institute of Pathology, Washington DC, 1966, p241.
- 2) 清水盈行, 八田善夫: 緑色腫の研究. 日血会誌 28: 269, 1965.
- 3) Krause JR: Granulocytic sarcoma preceeding acute leukemia: A report of six cases. Cancer 44: 1017, 1979.
- 4) 星野元宏, 他: 眼窩に初発した緑色腫の1症例. 日本眼科紀要 30: 174, 1979.
- 5) Shimizu K, et al: A potentially theapeutic approach to a non-leukemic patient with granulocytic sarcoma. Acta Haematol Jpn 48: 164, 1985.
- 6) Mason TE, et al: Granulocytic sarcoma (Chloroma) two years preceeding myelogenous leukemia. Cancer 31: 423, 1973.